

表現力育成のための1分間スピーチ

- 高等学校における「総合的な学習の時間」の充実に向けて -

専門研修員 家亀 照夫(川崎市立高津高等学校)

主題設定の理由

小学校、中学校ですでに「総合的な学習の時間」が実施されており、高等学校では2003年度から「総合的な学習の時間」が実施される。先に川崎市総合教育センターの平成11年度の研究紀要には、川崎市立高津高等学校の複数教科による関連的・横断的授業という「総合的な学習の時間」の理念に立った研究の記録がまとめられている。ここには「複数教科で連携する環境学習の焦点は、国語科における『表現』の学習活動を連携させたことにある」「自分自身が調べたことも含め自分の意見を文章に書き、発表の場で自分の言葉で話す人の発表を聞くといった一連の活動が有効であったのではないだろうか」¹⁾と記述されている。このように「総合的な学習の時間」と国語科の関連で、「表現」活動の重要さ大切さが述べられている。生徒がお互いに話したり聞いたりする活動が少ないということの現状認識の中から、これからの生徒に必要な力は何か、付けたい力は何かを考えた結果、発表力・表現力であると考え、一昨年からは、国語科の時間に1分間スピーチを行ってきた。聞き手も発表者も互いに発信し合う関係の中で1分間スピーチを行っている。生徒の学習感想には、スピーチはみんなの前で話せるいい機会であり将来役に立ち楽しいもの、とある。この意味で国語科として「1分間スピーチ」の充実を図り、「総合的な学習の時間」における表現活動の充実に向けて、表現力を育成する研究をさらに進めることは意義あるものとして上記の主題を設定した。

研究内容

1. 研究のねらい

スピーチというのは、受け身な態度では成り立たない能動的な学習であり、生徒は主体的な立場で学習することができる。スピーチ学習のメリットには、同世代のものの見方や考え方を直接本人から聞くことができる点にある。人のもっている情報交換の場でもある。発表者はクラスの一員として、自分がどんな人間なのかという自分の体験や関心・興味等の内容を開示して、自己表現活動を行う。この発表者の表現力は、相手意識に支えられてこそ育成できると考えた。そこで、相手意識を高めながら表現力を育成する指導方法の工夫を探った。

2. 研究方法

(1) 相手意識を明らかにする

相手意識といっても大変多岐にわたる内容がある。本研究では相手意識として次の三つ選んだ。

事実を的確に伝えようとする気持ち。

相手を尊重する敬意の気持ち。

話し手・聞き手として、さまざまな考え方を認める姿勢。

(2) 相手意識を高め表現力を育成する指導方法を考える

相手意識 では、分かりやすく伝えるために文章構成を整理したり、話し方を工夫する。

¹⁾宮津健一他「高等学校における環境教育推進についての研究」

「川崎市総合教育センター研究紀要」第13号(平成11年度)p127

相手意識 では、相手に敬意を表す文末（語尾）表現の工夫をする。

相手意識 では、人にはその人らしい感じ方やものの見方があることを肯定的に受け入れ、相手の良いところを認めて感想を書くようにする。

このような指導を通して相手意識を高め表現力を育成しようと考えた。

(3)スピーチ学習の資質・能力の整理をする

ここで、スピーチ学習における原稿作成から発表までの過程の中で養われる「資質・能力」を整理してみた。

<話し手の学習>

ア 情報収集能力 イ 情報選択力 ウ 情報活用能力 エ 情報発信能力(本単元)

オ 正誤，適否，美醜の言語感覚(本単元) サ 前向きで能動的な姿勢(本単元)

<聞き手の学習>

カ 要点(中心的部分)をとらえる力 キ 内容を焦点化する能力

ク 評価をする力 ケ かかわる力

資質と能力と活動の場面の関係

そして、本単元において育てたい資質・能力をより具体的に明らかにした。

<話し手の学習>

話題にふさわしい材料を選ぶ活動，取材・収集・選材する。ア・イ

目的に合わせたひとまとまりの文章を完成する。ウ

信頼関係を築こうという能動的な学習態度をもつ。(本単元)サ

事実と考え(意見)を分けて文章を整理し表現する。(本単元)エ

発表者は目の前の聞き手に対して，相手を意識し場に合った言葉づかいを工夫する。(本単元)オ

<聞き手の学習>

内容 要点(中心的部分)をとらえる力を養う。カ

短い言葉で表現する力を養う。キ

見出しなどを付けることによって，聞き取った内容を焦点化する。キ

表現行為・内容の適否，美醜に対する一定の判断や評価をする。ク

仲間への率直な言葉かけ(共感・気づき・励まし)をする。(本単元)ケ

(4)授業実践をし指導方法を振り返る

相手意識を高めながら表現力を育成するという授業実践をして，その指導方法を振り返る。振り返りの方法としては，個人指導の様子をとらえたり，生徒の学習感想を読んだり，授業での見取りなどで取りまとめる。

3. 研究の実践

生徒は1年生の時から1分間スピーチを行ってきている。クラスの仲間の前で発表をしたり，友達の話の聞く楽しみを経験して来ている。研究対象のクラスは理科系のクラスで，国語の教科の時間に各クラスから集まってくる合同クラスである。ホームルームのクラスが別の生徒たちであり，日常的には違うクラスで生活しているので，国語の時間のスピーチには関心をもって参加している。1年次から続けている1分間スピーチの体験を生かして，この研究では，より高い表現力の育成をねらって，相手意識という観点に着目して指導計画をたてた。

本単元「表現力育成のための1分間スピーチ」の研究を進めるにあたり，「思い出に残った出来事に

ついて、印象に残ったことを紹介しよう」という単元の設定を行う。生徒は、冬休みの課題として、出来事を三つ選び記事として事前に書いてきている。

単元名「思い出に残った出来事について、印象に残ったことを紹介しよう」(研究授業)

単元の目標 1分間スピーチの活動を通して「相手意識を持ち、伝えるべき内容(事実や考え)を的確に話す力」を育成する。

学習指導計画

第1次「二年生になってからの三大ビックニュース」を書こう(冬休みの課題)。

第2次「二年生になってからの三大ビックニュース」から話題を一つ選び、1分間スピーチの発表原稿を書く。(研究授業)本時

本時の学習目標 出来事の様子(事実)・や気持ち・考えを伝えるために相手意識をもってスピーチのための発表原稿を書く。

評価の規準 相手意識をもった丁寧な文末表現で書く。
出来事(事実)から気持ち・考えを伝える。

本時の指導

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
作文ファイルを準備する 1. 「2年生になってからの三大ビックニュース、自分の身近に起こった出来事について」から一つを選び、1分間スピーチの「発表原稿」を完成する。 次の条件で書く。 ア. 題名をつける。 イ. 字数四百字のスピーチ原稿を書く。 ウ. 本文中にその出来事を選んだ理由を書く。 エ. 本文中にその出来事を通して伝えたい気持ち・考えを述べる。 2. スピーチ反省原稿(友達もらったメモを読んで書いた感想)を参考に、次のスピーチでの自らの目標と課題を書く。	選んだ出来事(事実・様子)が、ともに教室で生活する仲間に伝えなければならない事か、聞き手に対する題材の配慮、話題の価値を、選択する時に考えさせる。 共通体験的な出来事が、伝えたい気持ち・考えをクラスの仲間に共感的に受け入れられるやすい。 学校行事での出来事はスピーチの題材として伝えやすいが、個人の貴重な体験や経験を述べる機会でもあるので、条件の範囲で生徒に考えさせる。 伝えることは、メッセージであり、主張・意見・考え・気持ちの順で論理性が高く客観的な説得する力が必要になるが、ここでは、本時のねらいにそって、次の評価の観点で評価する。 その出来事を選んだ理由が書かれている 誰が(主人公)・日時(いつ)・場所(どこで)・どうした(行動)が必要に応じて書かれている。 伝えること(気持ち・考え)が書かれている。

冬休みの課題を第一段階の原稿として、1分間スピーチの発表原稿を仕上げることを目的に、文章を作成した。三つの話題を一つにしぼり、その話題を選んだ理由を考えるとところから各自が取組をはじめた。相手意識の観点からみると、冬休みの課題の段階では読み手(相手)が自分や提出先の教師であった。スピーチの発表原稿にする過程の中で、クラスの成員である各自が所属しているクラスの仲間を意識して原稿を作成することになった。伝えるべき相手がよりはっきりすることは、相手意識を高めることにつながる。時間をおいて自分の書いてきた課題作文を見るところは、自分の記事を客観的に読むことになる。そして、書き方のポイントをおさえて見るということにより、相手に的確に伝えようとする相手意識を高める効果がある。相手意識が高まった時に、書く手立てが具体的(条件ア・イ・ウ・エ.)に示されているので、生徒はスムーズに書き始めた。

書き方がわからないという生徒には、具体例をあげておくことが効果的であった。また、授業の中で、書き終わった生徒が友達と原稿を交換したりして相互に気づきあう機会があり、原稿を互いに読み合っただ感想を述べ合っていた。次に、今回の個別指導の具体例を次に掲げる。

生徒の原稿

はじめの原稿	改めた原稿
<p>相手意識 的確に伝えようとする観点</p> <p>生徒A 僕は、今年になって2年生になりました。今年は昨年までとは違って 類型と 類型の合併クラスになりました。ずっと 類型の人たちと一緒にだと思っていたので、 類型と合併と分かった時はすごくうれしかった。 指導 何を伝えたいのかを整理してはじめに話そう、いっそう効果的に伝えられる。</p> <p>生徒B 私はこの前の 11 月に行われた生徒会役員選挙でみなさんの信任を得て生徒会副会長になった。 指導 どんな事実を通してどういう事を伝えたいのか明確にしよう。</p> <p>生徒C 僕は今年の文化祭はとても楽しかった。去年は特に何をするのもよくわからなかったし、たいして見たりもせずじっといたし...。 指導 話題をはっきりして、どんな事を伝えたいのか、整理して話のはじめにもってこよう。</p> <p>生徒D 類型のクラスに入り、自分の好きな生物を選択して、楽しく勉強ができると思っていた。しかし、 類型でまっていたのは好きな教科よりも重くのしかかる数 , 数Aだった。 指導 話型を利用して、話しかけよう。</p> <p>書き出しの例 その出来事を選んだ理由は～</p>	<p>今年から , 類型が合同クラスになりました。僕はこのことが発表されるまで、ずっと 類型だけのクラスだと思っていたので、分かったときはすごくうれしかったので、このことについて話してみようと思いました。</p> <p>この前のスピーチでも少し話したのですが、私はこの学校の生徒会副会長をさせてもらっています。今回のスピーチでは、みなさんにもっと生徒会執行委員がやっていることもっと知ってもらいたいと思います。</p> <p>僕は、文化祭について感じた事や思った事を話したいと思います。なぜこの事を話そうとしたかという、このことがよく印象に残っているからです。</p> <p>2年生になって体育祭・文化祭など大きな行事がたくさんありましたが、僕は 類型を選んだことについて話したいと思います。僕が 類型の話を話題にしようと思った理由は、僕の性格にあります。</p>
<p>相手意識 相手を尊重する言葉遣いの観点</p> <p>生徒E 僕は1年生の時に初めて「合宿」というものに行きました。 指導 何を話題にするか最初に伝える。相手に話し掛けるような口調で。文末表現をていねいに。</p> <p>生徒F 最後まで悩んでいたのを覚えている。 指導 聞き手を意識した言葉遣いにする。</p>	<p>「ビックニュース」とまではいきませんが、2年になっての印象が強かった事、それは夏休みにあった合唱部の合宿です。</p> <p>最後まで悩んでいたのを覚えています。</p>

相手意識 的確に伝えようとする観点では、分かりやすく伝えるための配慮として、はじめに「事実」次に「述べ伝えたいこと」と事実の提示だけでなく話題を明確化しているところが改善されている。生徒A・生徒B・生徒C。生徒Dは話型を利用させた。

相手意識 相手を尊重する敬意の気持ちの観点では、生活を共にする仲間に対して、場面に合った

言葉遣いを工夫し、ふさわしいものの言い方で伝える力を育てる。生徒E・F。

第3次「スピーチ・発表会」(本時)

本時の学習目標 ・発表者 出来事の様子(事実)・伝えたいこと(気持ち・考え)が伝わる簡潔なスピーチができる。

相手を尊重する言葉遣いができる。

聞き手を意識して、声の大きさ・話す速度・間の取り方に配慮する。

・聞き手 相手の方を向き、その話題の中心をとらえる。

人にはさまざまな考え方がありその違いを認めて聞く。

本時の評価の規準

表現【発表者】・内 容 出来事の様子が簡潔に表されている。

伝えたいこと(気持ち・考え)が、出来事と考えの関係で整理されている。

・話し方 聞き手を意識して、声の大きさ・話す速度・間の取り方に配慮する。

理解【聞き手】・聞き方 発表者の方を向いて、話の要点をとらえながら聞く。

人にはさまざまな考え方がありその違いを認めて聞く。

本時の指導

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1 本時の学習課題と流れをつかむ。 (スピーチが終わるごとに、感想交流をすることを 司会者はスムーズに進行するように発表者の 順番を伝える。 2 発表をする。 ・発表者は聞き手を見る。 ・場面に合った言葉遣いで、また原稿の 棒読みに気をつける。 3 発表を聞く。 ・発表者の方を向いて、話しやすい雰 囲気を作る。 ・感想が述べられる心構えで聞く 4 班員が発表者に全員感想を述べる。 5 本時の学習のまとめ(ワークシート) を書く。	・身体の向きを教師の方に向くようにし、本時の学習課題と 流れを伝える。 ・生徒自身が目標をもつて前回書いた「スピーチ発表の反省」 を生かす。 ・司会者には、「始めの言葉」と「結びの言葉」の話型のプリ ントを渡しておき、必要に応じて利用させる。 発表者・聞き手の反応を見ながら声の大きさ・話す速度・間 の取り方を工夫させる。 聞き手・相手の話を聞きながら、その話題の中心をとらえる ように聞く。 ・感想を述べるために必要に応じてメモをとらせる。

発表者には「心を言葉にのせて」「言葉にこころを込めて」、聞き手には「熱心に話しているのに下を向いていたらどうですか、みんなの嫌いな無視されたことになるでしょう」と話した。班での発表会はクラスの人全員に向かって話しかける従前のスピーチと違い、近い距離に聞き手がいるという状況でスピーチが行われた。発表者(話し手)と聞き手の距離が近いので、互いに表情が読み取れ、相手の反応を見ながら話すことができる学習となる。各班、録音機のチェック、司会者の言葉で開始された。その結果を次にまとめる。

相手意識 的確に伝えようとする観点では

生徒の感想から「文章の構成がしっかりしていて聞きやすかった。」「話の流れと、それによって自分がどう変わったのかが具体的に話されていてよかったです。」「その時の様子・情景と自分の気持ちを短くまとめて一つのスピーチに作り上げていた。」話の内容が分りやすく整理されている構成と具体的な事実によって、相手意識をもって取り組んだことがうかがえる。

相手意識 話し手・聞き手として、さまざまな考え方を認める観点では

生徒感想から「同じテーマでも書いている内容とかが違うのが分かった。」「それぞれの考え方とかがあって同じテーマなのに感じ方も得たものも違うのだなと思いました。」「『十人十色』と言うように人それぞれ意見が違うものだなと思った。」発表者の貴重な経験を肯定的に聞いて、その違いから学んでいることがとらえられている。

まとめ

この研究では、「相手意識に支えられた表現力の育成」をねらいとして、指導の工夫をしてみた。人間関係が希薄だとか、かわりをもつことを嫌っているといわれる現代社会である。しかし、今回多くの生徒の感想に「ふだん人に話せないことも話せたり聞くことができ、とても貴重な経験だったと思いました。」「いかに相手に自分の気持ちと考えを伝えるかということと、相手の気持ちをくみとることの難しさを知った。」というように、相手を意識した学習をしている結果がうかがえる。このように、生徒の表現力は ~ までの相手意識を高めることによって、表現力を育成することの重要性が見えてきた。発表者に話したいことがあり、聞き手はそれをくみとって聞くという姿勢が、表現力を支えることになることも確かめられた。「不完全では伝わらない。適当では届かない。自分の言葉を伝え届けるための練習が授業で行うスピーチなのだ。」という発表の大切さを実感している感想があった。1年生の時から継続して行ってきた「1分間スピーチ」、その機会と場を生かしたこの研究では、相手意識を高める指導方の工夫を探ってきた。なぜなら、話したい相手がいて分かち合いたいという相手意識が根底にあってこそその表現力であろう。生徒の状況を見て、概ね達成できたのではないかと思う。しかし、ここにあげた以外にも相手意識には、「話題を相手にとって価値あるものにする」とか「アイコンタクト」等いろいろなことがある。今後の研究課題としてとらえていきたい。これからも表現力の育成を図るために、生徒に成就感のある質の高い学習経験させなければならないと考える。また、2003年度からはじまる「総合的な学習の時間」の充実に向けて、この研究が実の場の表現力育成に役に立てばと願っている。

最後に、研究を進めるにあたり適切なご指導ご助言をいただきました先生方、また研究にご支援ご協力下さいました校長先生をはじめ国語科の先生方、学校教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|-----------------------------|-------|
| 文部省『高等学校学習指導要領解説 国語編』教育出版 | 1989年 |
| 文部省『高等学校学習指導要領解説 総則編』教育出版 | 1999年 |
| 文部省『高等学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社 | 1999年 |
| 日本国語教育学会編『国語教育辞典』朝倉書店 | 2001年 |

【指導助言者】

- | | |
|-------------------|------|
| 川崎市総合教育センター研修指導主事 | 白井 理 |
|-------------------|------|